



專業ババ奮闘記(その2) 57

木幡智恵美

虫捕り (4)

朝は、二男の弁当作りが仕事に加わった。コロナ感染拡大により、学校が休校になっているので当然給食はなし。しばらくは、「適当に買って食べるから」と言っていた二男も、連日の買い弁に飽き、金も無くなってきたのだろう。大きなおにぎり二個、冷凍していたおかずの残りなどを詰めたパックを袋に入れ、玄関に置く。

自力で歩くことが難しくなってきたから、義母の世話も少しずつ増えてきた。二階にブザーの音が聞こえるリモコンをベッド脇に置いていたが、夜中に度々鳴らされるとたまらないと言って、夫が電池を抜いてしまった。その代わりに、合図に襖を叩くようになった。連休明けの二日間、合図の度に、「ハイベン」と言われ、トイレに連れて行く。催してはいるが出ないらしい。行く度に、「ハイベン」「ハイベン」だ。三日目の朝、トイレに連れて行き、ドアの外で待っていると、「智恵美さん」と呼ばれる。「出かかちよう」と言われるので覗いてみると、少し見える。ゴム手袋をはめ、少しだけつまみだした。

その日は義母をデイサービスに送った後、玉湯に出かけた。雨降り、軒下に寛大と実歩、そして宗矢を抱っこした娘の姿があった。寛大の縄跳び練習を見ているのだ。縄を回して一回飛び越すことはできるが、連続してはできない。寛大の目は潤んでいる。娘には、「無理して続けると、義一みたいに坐骨神経痛になるよ」と言い、皆で家の中に入った。しばらく実歩の相手をしていたら、「面白い物に出かけるから、子どもたちを頼む」と娘が言うので、宗矢を預かる。大分私にも慣れ、お母ちゃんがいなくても大泣きはしなくなった。寛大はテレビを見、実歩と私で宗矢の相手をし、娘が帰るまで泣き声なしで済んだ。

昼食後、孫たちと娘が寝ると、雨で出られないので、パソコンを開き、点訳の校正をする。昼寝から起きたら、寛大はお絵描き、実歩は私とパズル。寛大が何を描いているのかと紙を覗くと、カブトムシだった。長男もよく虫の絵を描いていた。帰ってデイサービスの車を迎えると、車椅子で降りてきた義母は満面の笑みを湛えていた。「出ましたよ、たっぷり。皆でバンザイでしたよ」と介護士さん。

コロナの感染者が多発している地域に住む孫が、先日三歳の誕生日を迎えました。三年前の生まれた当時は新型コロナのこの字もなかったのに、娘は何事も無く里帰りをして自分が生まれた病院で出産をしたのです。

大きなお腹を抱えてふうーふうー言っている娘を見守り、そしてその後生まれた小さな命と過ごした数ヶ月は、自分にとつとでも喜ばしくて貴重な時間でした。これがもし現在の事だったらどうなっていたらどうか考えるのも怖いほどです。ただでさえ妊娠出産は難儀な事なのに、コロナ禍であればなお更であるに違いありません。

残念ながら万一を考えて娘夫婦と孫には二年近く会っていません。とはいえ秋の七五三のお参りの頃には大丈夫だろうと思っていました。が、まだまだ見通しは定かではありません。それでも混沌の中ようやく国内でのワクチン接種も進み、多数の人が接種をすれば集団免疫がついて流行も落ち着くなどと楽観的な見方もありますが、やってみなけりやどうなるかわからないというのが本場のところようです。事実接種率の高さがある国で、一時的に感染者数が減ったもの

変異ウイルスによって再び増加したとの報もあります。テレビのニュースで高齢者の方が接種を終えて、これで一安心ですと安堵の表情をされるのを見ますが、そんなに簡単に安心してもよいのでしょうか。

いい例が毎年のインフルエンザの流行です。例年多くの方が予防接種をしているのにも係わらず感染が多発して大流行を繰り返しています。集団免疫とやらは機能しているのでしょうか。そのインフルエンザが昨冬は影を潜めました。コロナに対する感染対策がインフルエンザにも功を奏したのでしょうか、そもそもその要因は世界的な人の流れが減ったことだといわれています。

今後多くの人がワクチン接種を受けて安心して県を跨いで国を越えて動き回れば、変異株の発生と冬のインフルエンザの流行で、国内が文字どおり猖獗を極める状態に陥るのではないかと危惧しています。最後の砦である筈のワクチン接種が、逆に大混乱を招く結果になるかもしれないのです。

この想像が暇な妄想ジジイによるファンタジーで終わることを願っています。それでは、無事オンラインピックが開催されますように。

30代フリーター やあ、ジイさん。経団連の会長になった十倉雅和が「社会全体の利益を求めていかなければ経団連は社会から支持されず、政治への影響力も持ち得ない」と語ったと報じられている（6月1日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 現在の資本主義が何を新たな利潤の源泉としようとしているか、それを示唆した発言に聞こえる。

記事は十倉が「市場原理主義に基づく行き過ぎた効率追求や規模拡大が、格差の拡大や気候変動、生態系の破壊を招いているとの見方を示し、『良識ある経営者は、今までの企業、資本主義のあり方に危機感を持っている』と話した」と伝えている。これは「格差の拡大や気候変動、生態系の破壊」があるとすれば、そこにこそ利潤の源泉を求めなければならないし、それは可能だという表明にほかならない。

問題のものが「市場原理主義に基づく行き過ぎた効率追求や規模拡大」にあるなら、「市場原理」に代わる、あ

るいはそれを補完する原理が必要であり、その最有力候補とされているのが「国家原理」だ。リーマンショックは国家なしには資本主義が作動しないことをあらわにした。大規模な経済停滞から立ち直るには、国家による大規模な財政出動が必要だった。

「国家原理」にもとづく機能のひとつが富の再分配であり、格差の是正も脱炭素も、その機能の働きなしには実現することはない。そのさいの大規模な財政支出とその波及効果は資本の新たな利潤の源泉となるはずだ。「大きな政府」政策を鮮明にしたバイデン政権はいま世界の先頭を切つて、その源泉の開発に乗り出そうとしている。

30代 「市場原理主義」は国家を邪魔者扱いさえしてきた。

年金 資本主義も、国家も、富の稀少性なしには成り立たないシステムだ。資本主義を駆動する自由競争は、富があり余るほど潤沢なら、必要なくなる。国家の主要な機能である再分配も同じだ。

ては不可能だ。国家の再分配機能が不可欠となる。現在の資本主義はその機能を使うことによつて、格差の是正を利潤の源泉にしようとしている。

30代 先進諸国では長いことゼロ%前後の金利が続いている。資本が利潤をあげられなくなったということだから、資本主義は終わりに向つていているという見方がある。

年金 日本でゼロ金利が続く要因について経済学者の池田信夫は「製造業の空洞化による国内投資の不足が、2000年代以降のデフレやゼロ金利の最大の原因」と指摘している（「日本のデフレの正体は製造業の空洞化だった」、JBPress、6月12日）。ゼロ金利が製造業の空洞化に起因するとしたら、それは第2次産業のあげる利潤が第1次、第3次産業にくらべて格段に大きいことを示している。

興隆期の資本主義は農村という辺境と都市という開墾地の間にある労働力の価格差を搾取することによつて利潤を生み出した。先進諸国でそうした農

資本主義は国家よりもはるかにあとに誕生した。自由市場での商品交換が支配的な社会は、それ以前の社会、すなわち国家による再分配が支配的な交換様式だった社会よりも富の稀少性の縮減が進んだ社会といえることができる。言い換えれば、国家による再分配に大幅に頼らなくても、自由な競争によつてある程度まで富が一般の民衆に行きわたるほど生産力が高まった社会ということだ。

その社会は一般の民衆にモノやサービスを買える力がないと回転しない。経団連の会長が格差の是正を口にするようになったのは、一部にカネが集中し過ぎると、企業の生産したモノやサービスが売れなくなるからだ。大金持ちであつても、消費には限度がある。余ったカネは投機に回されたり、退蔵されたりする。それらが一般の民衆に回れば、消費に使われるから、企業の生産したモノやサービスが売れるようになる。

だが、格差の是正は自由競争によつ

村（辺境）がわずかになると、国外にそれを求めた。それを地球規模で進めたのが近年のグローバル化だ。かつての農村に匹敵するのが旧社会主義諸国や中国のような新興国、発展途上国だった。

辺境の存在が利潤の源泉になり得たのは、人類史を支配してきた富の稀少性の大幅な縮減を産業革命が実現した

ニュース日記 789
中村 礼治

資本主義と国家

からだ。「西欧の1人あたりGDPを西暦1年からグラフにすると、産業革命を境に崖ができていると思うほど」（「山口真一のメディア私評」、6月11日朝日新聞朝刊）その縮減幅は大きい。

製造業が生み出した衣・食・住にわたる富は、人間の生存の可能性をそれまでの時代にくらべて大きく広げた。それが大量の新たな消費を民衆に促した。その費用は資本が支払う労働賃金によつてまかなわれ、その循環が利潤を生んだ。

辺境を国外に求めたことによる製造業の空洞化は日本だけでなく、どの先進諸国でも進んでいる。第3次産業の中心をなすサービス産業は自動車産業のように賃金の安い海外に生産拠点を設けることができない。つまり利潤の源泉となる辺境を持ち得ない。

資本主義の隆盛は製造業の隆盛だった。第3次産業が第2次産業に代わつて経済の牽引車になったとき、資本主義は下り坂に入った。